

岩根 朋也さん（島根県大田市出身）
2018 年度 4 次隊 青年海外協力隊
派遣国：ウズベキスタン 職種：福祉用具
2020 年 3 月 8 日（日）中国新聞 SELECT 掲載



※中国新聞社の許諾を得ています

働く心意気も伝えたい

シルクロードのオアシス都市であったウズベキスタンに青年海外協力隊として派遣されて 1 年弱が過ぎた。ウズベキスタンという国にどのようなイメージが沸くだろう。アフガニスタンなど治安の悪い国を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。かく言う私も派遣前、「どんな国だろう」と少し不安もあった。

この国はもともと旧ソ連の一部で、第 2 次世界大戦後、日本人捕虜がこの地に抑留され強制労働を強いられた。抑留中には多くの犠牲者が出た一方、有名なナボイ劇場の建築に携わるなど、この国の発展にも大きく貢献した。その時の日本人の「真面目に、丁寧に」働くさまが現在も語り継がれ、今では親日国として知られる。

私は国立の義肢装具センターに配属され、義手、義足の製作技術向上の支援をしている。この地の月収は 1 万～3 万円ほどで、義肢装具にかかる費用も日本の十分の一に抑える必要がある。材料なども限られ製品の質は決して良いとは言えないが、同僚らも現状ではこれ以上の物は作れないと諦めている。

「丁寧に！使う人の気持ちになって。それがおもてなし」。約 1 年間これを言い続けてきた。「うるさい日本人だ、見られている時だけやろう」。最初はそんな態度で渋々やっていたが、自然と小さな気配りができる場面も増えてきた。

2 年という限られた時間で知識、技術を伝達するのは難しいが、一人の日本人として、かつてこの地に抑留された日本人が自らの仕事によって人々を魅了したように、私もその心意気を彼らに残したい。



キャプション：
義足を調整する義肢装具センターのメンバー